

JOFI OSAKA Vol.17

2006年(平成18年)1月10日発行 発行者/大阪府釣りインストラクター連絡機構

本部=大阪府中央区東心斎橋1-9-21ニュー長堀ビル3階 tel.06-6245-4800 fax.06-6245-1360 広報=大阪府北区天神橋3-8-15-301 tel.06-6358-4414 fax.06-6358-4445

 変革する時代の心構えについて

平成18年、釣りの世界にあらたな秩序が生まれようとしています。釣り人が非漁民であった時代から、漁業の一部としての遊漁になり、それがこんどは、水産資源の利用者としての位置付けを明確に獲得しなければならない時代へとさらに一步すすむ年だといえるでしょう。

昨年一年、JOFI大阪のみなさんには、多大のご活躍をいただきました。各地で行われた釣り教室はもとより、1月22日に開かれる大阪湾の水質調査報告を中心としたシンポジウムもその成果のひとつでしょう。貴重な時間を費やして、地道に積み上げたみなさんの活動の集積が、こんなかたちで評価されるに至ったのだと感謝しています。

新しい時代に、釣りの世界に何がおきるか、それはまだわかりません。しかし目指すべき方向としては、長い歴史のなかで、これまで釣り人が、いわば社会と切り離されて、あるいは切り離して享受してきた釣りという楽しみを、今後も続けていくためには、社会的に認められる存在でなければならないし、そうするためには、あえて社会の一部としての義務を先行させる必要があるのではないか、わかりやすく言えば、年々狭められていく釣り場を確保し、釣りを楽しむ同好の人々が絶えることのないようにするためには、釣り人が何かの意味で社会的に役割を果たさなければならなくなっているわけでしょう。

わたしたちが、どうしても守り抜かねばならないのは「公有水面で無主物を釣ることの自由」であり、同時に「魚が生息する環境」ではないでしょうか。

これらを守るためには、釣りを楽しむことにともなう環境への負荷の代償として、ある程度の労力の負担や、経費の分担もやむなしという雰囲気も生じてきています。

それならそれで、行政の側からは、1300万人もの多数存在している釣り人に対し、どのようなかたちで責務を感じとっていただけるのか、そのため積み重ねてきたわたしたち釣り人側の行動を、どう評価していただけるのか、そうした話し合いを繰り返していくのが釣りインストラクターの責務であり、釣りの未来はそれにかかっているわけでしょう。

抽象的なはなしになってしまいましたが、魚の生息環境を護り、魚を釣ることの出来る場所を守ろう。そのためにあらゆる機会を通じて、釣りというものの本当のありかたを知ってもらいたい。その順路のひとつとして、釣り協室や講習会で子供たちと親しんでいただければ…。JOFI大阪のみなさんには、これからさまざまなご苦勞をおかけしますが、ことしよろしく御協力いただくようお願いいたします。



来田仁成 (JOFI大阪代表)

釣り界の新しい動きは、こちらをご覧ください。

www.zenturi-jofi.or.jp

(社)全日本釣団体協議会のホームページです。外来魚問題や沿岸の釣りなど、釣り行政の動きを日々捕らえて全釣協としての姿勢、釣り人としての対応等についてまとめています。ぜひご覧ください。



生野区・親子ふれあい釣り入門教室



近藤幹雄（大阪東部支部長）



6月16日、区民企画室・石田係長より釣り教室の依頼が入り、9月15日生野区民広報にて募集、10月30日新築されたばかりピカピカの生野区役所6階会議室に於て座学を行なった。

今回は日程の具合上、1回のみ座学に短縮したが、講座だけでなく、募集他にも力添えをいただいた来田代表も多忙な中に参加していただき、東部支部7名の釣りインストラクターにて行なった。

来田代表のルール・マナー安全で始まり、魚の種類、仕掛け作り、釣餌、釣道具、各講師が熱弁をふるった。ハリ結びは、いつもの事ながら親子とも苦労されるが、皆さん慣れない指先で頑張っておられた。最後に実釣にむけて振り込みの練習を行なった。初めて握る竿で一生懸命に獲物(?)をめがけて座学を終えた。

今回の実釣は11月6日和歌山橋本市の隠れ谷池のヘラブナに決定した。

御縁は、東部副支部長楠森氏が橋本市で行っておられる「ヘラブナ釣り大学」の第2期卒業生であったこと、また、北大阪支部の柳田氏も同期生であり、実釣当日に同期生の同窓会があり皆さん協力を申し出ておられ、橋本市経済部地域振興課、紀州製竿組合の方々も応援していただけることになった。

11月6日実釣当日、週間天気予報では「晴れ」だったのに「なんでや!!」…5日夜の天気予報はテレビも新聞も「雨、雨、雨」ときた。そうだ、先週孫の運動会の時作ってやった「てるてる坊主」がまだあった… 神頼みしかない。「頼みます!!」

朝3時半、表に出てみるが空は真暗、朝刊もまだ来ない。テレビの天気予報もまだ、決行か? 中止か? 問々と朝の時間を過すが、いつもイヤなものだ。6時過ぎ現地へ先発の柳田氏より電話「雨です」。表へ出てみると大阪もバラバラと降り出した。参加者からの問い合わせ電話も次々とかかってくる。「てるてる坊主」に賭けてみた。「決行!」

南海新今宮駅で待ち合せ、参加者が次々雨ガッパ持参でJOFI大阪のフラッグの方へ集合。

雨はしっかりと振りだした。電車内でワイワイやっている間に紀見峠を越え、山々の頂上へ向け白い霧が走り上っている。あがるかも? 紀伊清水

駅着、雨はあがってくれた。JOFI大阪のフラッグを持った子供を先頭に、10時より製竿組合長・城氏より紀州竿の話、橋本市経済部地域振興課・中峰課長のヘラブナ、隠れ谷池の話の後、また降り出した雨の中へ子供達が雨ガッパを着て、ヘラブナ大学、組合の方が用意してくれた釣座へと急いだ。やる気満々である。

子供にはかなり高度な釣りであるが、大学の方がマンツーマンで背後から指導してくれている。「何とか1匹でも釣れてくれ」との願いの私のミノルタのファインダーの中に10分ぐらいたった時第1号が竿を曲げたのが写った。お母さんも曲げたが取り込みでバラした。2本バりにダブルで掛かった子も背後からインストラクターが応援する。見事にゲット。おもわずヤッ! まずまずのすべり出しである。

昼食後、降ったりやんだりの雨もあがった。あちこちで竿が曲がっている。皆要領を少し得たようである。父親がエサをつけ、子供が釣る、後方で母親

が傘をさしかけ応援している、ほほえましい姿もあった。

全員坊主なしである。3時納竿、検量、検すしてみるとどのビクにも5〜6匹、中には20数匹の大漁もあった。

最長寸33.9cm。今回は最後までナイショにしていたが、長寸に私のポケットマネーで買った小さいトロフィーをプレゼントしてみた。メガネ越しの小さな瞳がニコッと笑った(後日の便りでは机の上に飾ってあるそうだ)。そして2位以下の参加者に隠れ谷池管理者中西のおばちゃんが枝付のみかんをプレゼントしてくれた。

最後に全員でゴミなどの片付けの後、区民企画室石田係長、参加者から応援していただいた橋本市役所、製竿組合ヘラブナ大学、JOFI大阪の皆様への感謝の言葉で教室を終えた。

帰りの電車の中でも魚の話、自然環境の話を参加者と話し、また、子供達から「次はどこへ釣りに行くの」との声も出てきた。また今年もたくさんの方々とおふれあうことが出来て交流も始まった。来年も頑張ってみようと思った。応援していただいた皆様、そして「てるてる坊主様」ありがとうございました。

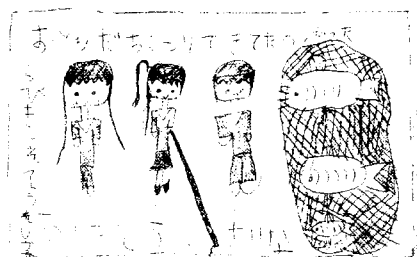
そして、今回の実釣は、橋本市、ヘラブナ大学、製竿組合と生野区親子のふれあい釣り入門教室の交流の様子が11月8日読売、毎日新聞に掲載されました。





参加者からの体験談

親子ふれあい釣り教室に参加して



先日は、釣り入門教室に参加させていただきました。その日は本当に有難うございました。母子共魚の種類すらよくわからない全くの初心者で、子供は以前から「魚釣りをしてみたい」というのですが親がわからないものを連れて行くわけにもいかず、聞かないふりをしていたところ、タイミングよく広報誌を見たのですが、子供も幼児で女の子で迷惑おかけしてもいけないし、ととりあえず区役所に聞きにいくと快く「お気軽に参加してください」と言ってくださり参加させていただくことになりました。

先生方やスタッフの方々のきめ細かなご指導、皆さん誠実なお人柄のおかげで2日間ともとても楽しい時を過ごさせていただくことができました。不安いっぱいだった現地では、名人先生に助けていただいてみごとに魚が釣れて、子供はすっかり夢中になって、その後自力でも大きい魚を釣ることができたので、満足感と楽しさに、とても明るく喜びいっぱいの表情でした。こういう機会がなかったら母子共一生魚釣りとは無縁だったと思うのですが、もしまた釣り教室の企画などが今後あるのならぜひ参加させていただきたいと思っています。

これを機会に魚のことも少しは子供と一緒に勉強したり話もできるといい、たいへん貴重な体験をさせていただきましたことを感謝しております。近藤先生には短時間のあいだに本当にたくさんの事を教えていただきました。本当にどうもありがとうございました。

(藤田幸代・紗利奈)

親子の絆・家族の絆

11月6日(日)、予報では昼を挟んで雨。多少引き気味に問い合わせれば「予定通り実施します」とのこと。「強行みたいだヨ。雨ヒドクならなければ、いいのねえ…」という会話と共に家族3人で出かけた。

実は最近でこそキャッチボールを一緒にするようになったが、外で体を動かして遊ぶことに関して言えば、元来食わず嫌いのほうで、それがひとつの心配の種だった。生まれつきの高度な食物アレルギーのために食事には相当な制約があって、限られた食材・メニューで作った弁当を一人食べる学校生活を送っている。そのせいばかりではないと思うが、今ひとつ、積極的に行動できない一面を持っている。今回の釣りに関しても及び腰で乗り気薄であったものを、天が与えてくれた機会だと思って強引に連れ出したものである。

運がよかったのかも知れない。団体の中ではいち早く釣り上げたし、一番大物も釣った。最初はコワゴワだった作業もいつの間にか手についているし、浮きが沈んだ瞬間に引き上げる動作も素早くできるようになっている。一緒に行った子供たちとも仲良く張り合っていた。当日いただいたトロフィーが机の上にさ

りげなく飾られるようになってから、「今度は海に釣りに行きたい」とか、「どちらが大きいの釣るか競争しような」と言う息子と、釣りを通して絆を強くしていきたいと思う。

今回の釣り教室が、新しい親子の絆・家族の絆を作ってくれたことに本当に感謝したい。でもそれ以上に感謝したいのは、この釣り教室を企画してくださった区役所の方であり、運営していただいたJOFIの方や子供たちに手取り足取りアドバイスしてくれた「ヘラブナ釣り大学」のOBの方々の時間と手間をいとわない献身的な行動に対してである。本当にありがとうございました。

(水野三津夫)

はじめてのつり

ぼくは、はじめてつりに行った。最初、魚をつるのはむずかしいだろうなと思っていた。実さい、うきが上下に動いたしゅんかんにさおを引かないと魚はつれなかった。でも、ぼくは、うきが動いたしゅんかんに、さおを力を入れて引いた。一度、Wはつれないと思っていたが、Wで魚がつかれた。二度目は、おしくも1匹逃がしてしまった。けれど、けんめいに引いて、朝は6匹つかれた。でも、午後からは、つれなかった。数で順位を決めると思っていたが、大ききで順位を決めると聞いて、一位にはなれないかもしれないと思っていたが、見事一位になった。その時、ぼくは、うれしいな、と思った。また、魚をつつてみたいと思った。

(水野翔太)

ようこそ、紀州へら竿の里・橋本市に!

中峯伸行(橋本市役所)

平成17年11月6日(日)、近藤幹雄支部長率いる一行が本市隠れ谷池を訪ねてくれた。今回のヘラブナ釣り教室は、本市が平成15年度に開設した橋本市「ヘラブナ釣り大学」の第2期生である楠森至郎氏が大阪府釣りインストラクター連絡機構に登録されているご縁で実現した催しである。

2時半過ぎの終了まで、ほとんど止むことのなかった雨の中、参加された皆さんは本当に熱心にヘラブナ釣りをやっていた。見せてもらいながら、事前の座学の成果か? 親御さんも子供さん方もなかなかの竿捌きを見せてくれた。途中の説明も飲み込

みが早く、教える側としては本当にいい生徒さんたちだと思った。奥深いと言われるヘラブナ釣り。実際私自身も大いにそれを実感するところだ。そんな深遠とも言える世界のほんの一端を感じてもらうだけの時間しかなかったと思う。だから「次また来たい! ヘラブナ釣りがしたい!」と思ってくれたら初体験は成功と言えるだろう。そのために、目一杯楽しもう! 何か一つでも掴んで帰ろう! という参加者のモチベーションは大変重要だ。雨という悪条件があったものの参加者の皆さんは、大人も子供もみんなそんな思いを持って一日過ごされていたと思うし、ヘラブナだ

けにかかわらず釣りという素晴らしい趣味・スポーツの虜になってもらいたいと念願する。

<今後の交流と相互協力へお願い> 今回の企画の実施と成功を受けて、近藤支部長からもお話がありましたとおり、今後とも大阪府下の生涯学習プランと本市とのヘラブナ釣り大学・紀州製竿組合・隠れ谷池との連携を深め、釣りの素晴らしさ・へら竿の魅力の発信に大いに繋げてまいりたい。“熱い思いが重なり合ったり、繋がりたり、そしてそれが続いていったらいいなあ。”いつもそう思っております。今後ともどうかよろしくお願いいたします。

バリア釣りー大会

報告:高瀬 諒(泉州泉南支部)

9月24日(土)、NPO法人みらいずの依頼により、泉北泉南支部を主に中川・近藤・川村・中山・日高・久保・高瀬の7名で淡輪ヨットハーバーで開催された「バリア釣りー大会」に協力参加した。

障害を持つ人や子供たちの新たな経験、生活の場を広げよう、その手助けの一端に



なればと企画された本大会も今年で5年目を迎え、参加者も障害者40名を超え、その介助者、家族、スタッフ、釣りインストラクター等総勢120名を超える盛会であった。

開会式の後、JOFI大阪の中川氏による釣り講座の後、6チームに分かれ午前の部が始まった。主にサビキでアジ・イワシ・チャリコ・海タナゴ・サンバンソウ・スズメダイ等々、釣れた魚は、BBQコーナーで魚のさばき方や調理法を習い、刺身、フライ等賞味した。この間インストラクター諸氏は食事の間もない程の忙しさに感謝していただいた。

午後の部、バリア釣りー大会は、6グループの代表が抽選で、物干し竿、バット、ほうき等日常にする物を竿にし、魚を釣ろうというユニークな大会で、釣れなかったのはバットの組のみと、喜びと驚き、和気あいあい終了した。

最後にクリーンアップ作戦による集めたゴミの検量があり表彰式がおこなわれた。特別賞を受けた小学4年生高瀬君を紹介したい。皆が釣り場の清掃に終始したのかかわらず、ひとり高瀬君は閉会式への道中でも黙々とゴミを拾っていた。自分のゴミさえ始末できない釣り人が多い中、他人のゴミまで拾い集め、釣り場の清掃に努めていた姿に参加者一同大きな拍手を贈り行動をたたえていた。

野崎青少年教育センター釣り教室

報告:松川正義(大東市立野崎青少年教育センター)

「家族で環境を考える」

9月18日(日)泉南郡岬町の淡輪漁港にて48名(16家族)の参加でファミリー釣り大会を開催しました。現地には午後3時頃に到着。釣りインストラクターのみなさんに釣り道具の用意をお手伝いしていただき、さっそく釣りはじめます。ところが、頑張っ

て釣っているのですが、5時ごろまで釣れませんでした。

のと同時にあちこちから歓声が上がりはじめ、アジやイワシが上がり始めました。魚の群れがきたときには、アジが3〜4匹掛かっている人もいました。どの家族にも魚が釣れ、数に差がありましたが、一日釣りを楽しんでいただけたようです。

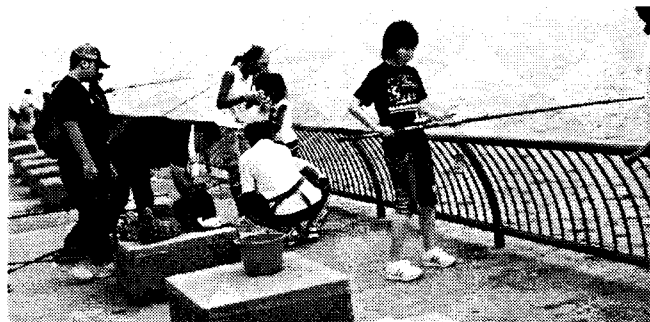
午後7時に終了の合図。もっと釣りたいところでしたが、後片付けをインストラクターの方に手伝っていただき、また、釣り場を来た時よりも美しくして釣り教室を終えました。当日のご指導ありがとうございました。



写真:運天朝雄(北河内支部)

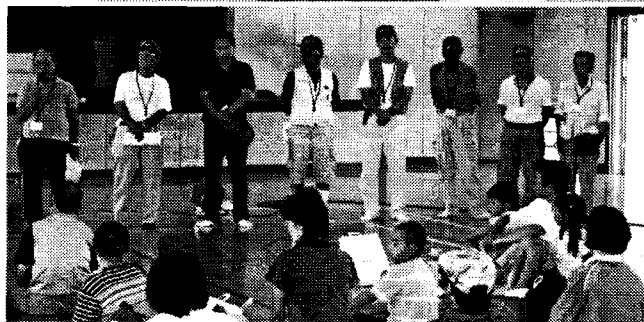
南山城つり教室

8月6日、正午。バスは南山城村大原を出発し、一途、奈良市経山大阪市を経て、神戸市平磯釣り公園へ。車中で釣り談義、釣りの注意事項、危険な魚類等の講座を開き、下車すればすぐ釣りの実技が展開できるよう準備完了。到着。リール竿にサビキ仕掛け、アミカゴに餌を詰め釣り開始。次々と小物たち(アジ、メバル、イワシ、サヨリ)が釣れ、バケツはどの家族も釣果でにぎやかです。夕刻近く、全員の釣り竿が大きくなり、悲鳴が上がリ、糸切れ続出。講師はテンテコ舞い。すべての予備バリを使い切り、ダウンです。曲者は人マグロ集団でした。帰路、車窓から花火を觀賞し、無事、深夜帰村しました。参加者26名、講師3名。



和束つり教室

8月27日。若狹湾・小浜海岸を釣り場と定め、それまでに下見に試釣行をしたのですが、大型台風近接で釣行をあきらめ、公民館で「つり講座」を開きました。川釣り、池釣りを講義。参加者26名、講師4名。



八幡つり教室

9月17日。小学校の体育館一杯に竿を出し、仕掛けをつけ、餌を作ります。入れ替りに講義する講師のむづかしい話に耳を傾け、昼食後、竿をかついで釣り場へ。小雨もなんのそのです。家族単位で釣り座を定め、右や左に竿を振り、定まらぬウキですが、空腹のコイはウキを引き込み、講師はタモを持って右往左往。見事な人物を釣り上げ、歓声が上がります。楽しい釣り教室でした。参加者27名、講師8名。



報告:吉川幾久雄(相談役、京都南支部)

東南亜細亜四島を行く二

北摂豊能支部長 大島 勇



昭和十九年四月二十日早朝「明二十日、二〇・三〇発夜行列車彼南第九警備隊二飯入隊セヨ」との命令があり、第十四警備隊付各兵員計十六名、二十一日夕食後各自、外糞水筒を身に付け、衣囊を担ぎ、退隊隊伍旅行にて、マレー鉄道シンガポール始発駅に行く。乗車迄待合所にて待機、暫くしてホームに列車が入る。各駅停車のブライ行きで五輛連結。二輛目は軍用、二・五輛は一般用。私達各兵員は二輛目中央部に固まつて旅装を解く。機関車の燃料は石炭と薪で、列車内は煤けて可成り汚れている。列車は定刻通り発車。ジョホール水道を渡って北上、翌朝クアラシンプールに着。水と燃料を補給する。私達も洗面他、食事(非常食)を終える。生水を飲む事は厳禁である。補給終了後発車、二路ブライへ。列車内は暑い。汗と煤煙で不快感が増々募る。唯救はれる事は車窓外の景色である。気は安らぐ。

英BBC地球伝説「素晴らしい列車の旅、東南アジア」二〇〇三年三月四日放映によるとやはりマレー半島は美しい緑の楽園オアシスだと思つた。一八・三〇、終着駅に無事到着。連絡船に乗換へ、ペナン島へ。

海上は穏やかである。この時船上より目にした船行波の夜光虫の為せる煌めき輝く様は正に神秘的としかいい様のない美しさであった。

下船後、「第九警」差し回しの車に乗車、無事飯入隊、翌二十三日より日課予定表通りの諸作業を行なう。五月十七日頃、シンガポールに輸送船「紅祥丸」が入港の報あり、此の船の装備は最良で、電波探知器、水中聴音機他、二十五ミリ砲二連双搭載。出来れば乗船の許可をと電報を発信するも、満載の為乗船叶わずの返信あり、仕方なく次の報を待つ。二十一日、昼食時俄然隊内が慌たしくなつて来た。そして生存者が三名、トラックで隊内へ運ばれて来た。彼らは体も服装も油に塗れて汚れている。物凄いショクだったろう。彼等の話によるとペナン港外で敵潜水艦の雷撃を受け命中。轟沈の様で船上に出て居た者のみ助かり、船中の人は全滅のようだ。そして船名は「紅祥丸」とのこと。私達は難を免れたようだ。

そして七月二十五日、命令があり「第十特別根拠地帯二飯入隊セヨ」と、再度マレー鉄道にて二十七日飯入隊。八月

二日同隊退隊、セレータ軍港へ停泊中の施設海防艦「初鷹」二六〇〇噸に便乗。同夕出航。マラッカ海峡航行中、翌三日、早朝、敵潜水艦の投下せる音響機雷一個に連続接触突然の物凄い爆発音に私は度肝を抜かれた。十七歳の初体験にしては余りにも強烈。おのき狼狽死の恐怖を味わった。我ながら恥かしく、情ない自分に腹が立った。しつかり大馬鹿者奴。点検の結果船体に異常なく操縦のみ破損。航行不能、人力操縦にて引き返す。四日深夜「十特根」に飯入隊。十七日、同隊退隊マレー鉄道にて十九日「第九警」に再度飯入隊。

九月十五日、早朝、同隊退隊ペナン港停泊中の輸送船「大朝丸」二六七〇噸に便乗する。乗船後所定の船室に、正午、昼食、食事後、食器類を洗つて、残飯を船尾に行き海中に投棄する。と、忽ち海面が変化、何処にこんな多くの魚がいたんだらう、とにかく魚の迫り上りの凄まじい迫力には圧倒された。後、船員に御願いして、風糸、人造テグス、釣針とお借りして仕掛を作る。まず一匹を何とか掛けなさいといけな。御飯を練つて丸め、針に付け、第二投、第三投、餌を取られて失敗。第三回目の落し込みで手応えがあり針掛かり、強い引きである。何とか甲板に引き上げる。手にした魚は九州大分県産のウオセによく似た十八糎ぐらいの魚であった。此の魚を切身にして餌に。次々とおもしろいほど釣れる。約二時間釣つてバケツ二杯分釣れたので中止。船内の鮑炊所に持つて行く。今晚の副食に炊いてくれることになった。

現地では砂糖、醤油は豊富にある。夕食が楽しんだ。六時頃食事が出来たので貰つて来て食器に入れ食卓に並べて頂く。魚を食べるのは二年半振りである。魚の味は美味しく出来て最高であった。食事後、食卓の後片付けを終る。「いよいよ今夕駆逐艦一隻護衛にて出航」の伝令あり。私達の任地は、印度洋ベンガル湾、アンダマン、ニコバル諸島のカーニコバル島である。軍では離島方面と呼ぶ最僻地で、しかも輸送船大朝丸には敵に対する装備は皆無であり、九月の印度洋は波高しの声を聞いた。果たして無事任地に上陸出来るか不安杯の出航である。

さらば東洋のスイスと称賛される、美の島ペナン島。

会員の皆様の貴重な釣り体験、エッセイ、意見などを募集しています。ぜひご寄稿下さい。

報告5

平成17年度「公認釣りインストラクター」養成講習と試験を実施しました



釣りインストラクターは、平成4年、(社)全日本釣り団体協議会が、水産庁から委託事業として認められた公認資格です。釣りを愛し、海・川・湖などの釣り場環境を守り、釣りの技術・ルール・マナー・水産資源の保護・安全対策の指導を含め、釣りの文化を伝え、釣りの健全な発展をめざすものです。

この資格の養成講習と資格試験が今年は下記の全国4会場にて行なわれ、大阪会場ではJOFI大阪のメンバーが講習と試験を行ないました。

受験資格取得講習会

- <東京会場>平成17年11月19日・20日
- <岩手会場>平成17年11月26日・27日
- <大阪会場>平成17年12月3日・4日
- <石川会場>平成17年12月10日・11日

JOFI大阪では新しく「公認釣りインストラクター」となられる方々の活動の場を作っていますので、ご相談などがあればご遠慮なくお願いいたします。

お知らせ

2006年フィッシングショー大阪にお集まり下さい

2月4日(土)～5日(日)午前9時～午後5時、大阪市住之江区「インテックス大阪」にて、『フィッシングショー-OSAKA 2006』が開催されます。JOFIのメンバーも大阪府釣り団体協議会のブースにて釣り相談コーナーでお手伝いしますので、皆様お集まりいただき、ご協力をお願いいたします。

フィッシングショー-OSAKA 2006

2006年
2月3日(土)～5日(日)
インテックス大阪・住之江区

みなさん、ぜひご参加下さい！

みなとの環境づくりシンポジウム

釣り文化協会発足報告会

1/22開催

1月22日(日)『みなとの環境づくりシンポジウム』が開催されます。会員の皆様、将来に向けた一歩となるこのシンポジウムに、多くの志ある釣り人をお誘い合わせの上、ぜひお集まり下さい。

内容としては昨年(平成17年)釣り人・研究者・国交港湾が協働の水質調査を行ないましたが、その報告と今後の港湾の環境づくりに向けた提言が予定されています。従来の港湾行政では考えられなかった市民との協働が実現し、良い「変化」が起こる兆しが見えてきていますので、お確かめいただきたいと存じます。

また当日は併せて将来の釣り人ボランティア活動の核となるNPO法人「釣り文化協会」の発足報告会も行いますのでお集まりいただき、釣り人の意気を結集できることをお願いいたします。

みなとの環境づくりシンポジウム
～釣り人との協働による環境モニタリングシステムの構築をめざして～

日 時 1月22日(日) 14:00～17:00
会 場 マイドームおおさか 8階 第1・2研修会議室
(大阪市中央区本町橋2-5 TEL: 06-6947-4321)

プログラム
第1部 (14:00～14:05) 開会
第2部 (14:05～15:25) 大阪湾の環境モニタリング報告(14:05～15:25)
報告1 「釣り人による環境モニタリングの取り組み」
報告者 来田仁成氏(NPO法人釣り文化協会代表)
報告2 「釣りとの関わり(大阪湾の釣魚の増減と考えられるきっかけ、魚の就餌行動の体系等)」
報告者 鍋島靖信氏(大阪府立水産試験場主任研究員)
第3部 パネルディスカッション(15:35～16:55)
パネリスト 来田仁成氏(前掲)
鍋島靖信氏(前掲)
中川富士男氏(海の再生環境技術センター所長)
桜井政和氏(水産庁沿岸沖合課釣り専門官)
関藤博史氏(NPO法人環境教育技術振興会理事長)
コーディネーター 鷲尾主司氏(京都精華大学教授)
(交流会＝シンポジウム終了後、会費制気軽な交流会を用意)

主催 国土交通省近畿地方整備局神戸技術調査事務所
大阪湾見守りネット・NPO法人 釣り文化協会
共催 大阪湾環境教育技術振興会(代表 関藤 博史 TEL: 06-6942-8732)

第2回「みなとの環境シンポジウムin大阪」(参加費無料)

主 催 国土交通省近畿地方整備局神戸技術調査事務所
大阪湾見守りネット
NPO法人釣り文化協会

日 時 平成18年1月22日14時～17時

(12時30分～13時30分 NPO法人釣り文化協会発足報告会)

(17時20分～ 関係者・関係団体交流会)

会 場 マイドームおおさか 8階 第1・2研修会議室

大阪市中央区本町橋2-5 松屋町筋・内本町交差点から北へ

大阪商工会議所北隣 (tel06-6947-4321)

地下鉄 中央線および堺筋線の「堺筋本町」駅の1、12番出口から徒歩7分

谷町線「谷町4丁目」駅の4番出口から徒歩7分

<プログラム>

第1部「大阪湾の環境モニタリング報告(14:05～15:25)」

報告1 釣り関係者による環境モニタリングの取り組み

報告者＝来田仁成氏(NPO法人釣り文化協会代表)

報告2 釣りとの関わり(大阪湾の釣魚の増減と考えられるきっかけ、魚の就餌行動の体系等)

報告者＝鍋島靖信氏(大阪府立水産試験場主任研究員)

第2部 パネルディスカッション(14:35～16:55)

パネリスト 来田仁成氏(前掲)

鍋島靖信氏(前掲)

中川富士男氏(海の再生環境技術センター所長)

桜井政和氏(水産庁沿岸沖合課釣り専門官)

関藤博史氏(NPO法人環境教育技術振興会理事長)

コーディネーター 鷲尾主司氏(京都精華大学教授)

(交流会＝シンポジウム終了後、会費制気軽な交流会を用意)

民に向けて開かれた港を目指して、さまざまな目標が掲げられています。

こうした現状から見た時に、釣り人の海への思いと港湾当局の試みとは、完全に合致しているわけではありません。海環境再生を国民的なムーブメントとして推進するためには、

釣り人(市民)、専門研究者、港湾関係者などの協働による環境モニタリングシステムの構築をめざす話し合いが必要でした。

NPO法人「釣り文化協会」はこうした調査などを目標に公認釣りインストラクターのメンバーを主に平成17年7月1日に発足しました。そして、平成17年11月には、大阪湾を取り巻く、兵庫県、大阪府の市民団体や官公署、研究機関、企業が連携して活動を進めるための「大阪湾見守りネット」が結成されました。

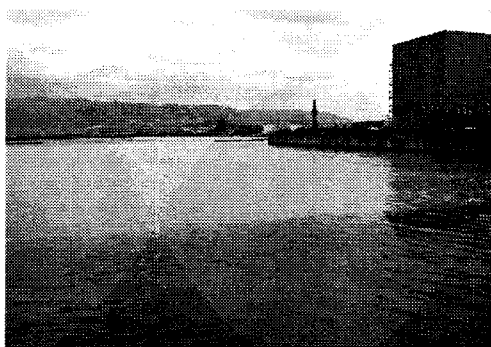
「みなと」と「釣り人」が共通した目的をもって海の環境調査を行ない、これを「研究者」の方々がサポートするというかたちの「釣り人による大阪湾水質調査」は、最初のモデルケースとして平成17年8月中旬から10月中旬まで2カ月間にわたって行なわれました。

「釣り人が魚の動きや就餌状況、溶存酸素量の測定から得た水質の変動」は、大阪湾の奥で発生した「青潮現象」の予兆を確実に捕らえていました。(写真参照)

「海」の環境に最も近く、大きな関心を持

つ市民」としての釣り人と、港湾関係者と、研究者の強い結束の成果と今後の方向付けを全国ではじめて大阪湾から発信したいというのが、この「第2回みなとの環境づくりシンポジウム～釣り人との協働による環境モニタリングシステムの構築をめざして～」のテーマです。

パネリストには、水産庁釣り人専門官 桜井政和氏や大阪湾でダイバー仲間が集まり海底の撮影をするうちに大阪湾で絶滅したと思われていた「アマモ」を発見以後、魚の回復のための産卵場としてアマモの増殖ボランティア活動に専念しておられる関藤博史氏などを予定しています。コーディネーターには漁業の現場を知るために兵庫県林崎漁協専務理事まで経験され異色の水産学者として知られた鷲尾主司京都精華大学教授にお願いしています。これまで釣り人の知らなかった「海の世界」を知る貴重な機会でもあるので、ぜひ参加下さい。



青潮をとらえた写真。

<シンポジウムの目的と背景>

第2回シンポジウムに至るまでの経緯について解説を付け加えておきます。

平成15年秋、国土交通省の依頼により、公認釣りインストラクターのみなさんの協力を得て、大阪南港魚釣り園で、はじめて釣り人に向けたアンケート調査と釣り教室の集いを開きました。港湾と釣り人の協働のはじめです。この結果を受けて翌16年3月23日、第1回「みなとの環境シンポジウムin大阪」(主催:国土交通省近畿地方整備局港湾空港部)が開かれました。港湾関係者と釣り人が公式に話し合った歴史的な出来事でした。

みなとと釣り人の関係は、遠い昔から切り離せない深い縁に繋がっています。もとより、海がなくては、釣りも船も存在し得ません。いま、海の水質環境は少しずつ回復に向かいつつあるとされています。その一方で、たとえば大阪湾の魚に例をとれば、大幅に減少しつつあるというのが、釣り人の感じたまの現状です。

一方で、港湾関係諸官庁では、海環境回復と市